

人口減少・子育て支援対策調査特別委員会会議記録

人口減少・子育て支援対策調査特別委員会委員長 佐々木 努

- 1 日時
平成30年4月10日（火曜日）
午前10時1分開会、午前11時55分散会
（うち休憩 午前11時36分～午前11時42分）
- 2 場所
第2委員会室
- 3 出席委員
佐々木努委員長、佐々木宣和副委員長、関根敏伸委員、小野共委員、名須川晋委員、
佐藤ケイ子委員、千葉伝委員、柳村岩見委員、千葉絢子委員、工藤誠委員、
高田一郎委員、木村幸弘委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
竹花担当書記、須川担当書記
- 6 説明のため出席した者
西和賀町教育委員会 生涯学習課
文化創造館アートコーディネーター 小堀 陽平 氏
- 7 一般傍聴者
3名
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
「芸術文化で地域をひらく／再創造する」
 - (2) その他
ア 委員会県内調査について
イ 次回の委員会運営について
- 9 議事の内容

○佐々木努委員長 ただいまから人口減少・子育て支援対策調査特別委員会を開会いたします。

委員会を開きます前に、当特別委員会の担当書記に異動がありましたので、新任の書記を紹介いたします。

竹花担当書記。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付いたしております日程のとおり、

芸術文化で地域をひらく、再創造するについて調査を行います。

本日は、講師として西和賀町教育委員会生涯学習課文化創造館アートコーディネーター、小堀陽平様をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。

○**小堀陽平講師** 西和賀町から参りました小堀です。文化創造館でアートコーディネーターという仕事を昨年度からさせていただいております。よろしくお願いいたします。

○**佐々木努委員長** 小堀様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。本日は、芸術文化で地域をひらく、再創造すると題しまして、西和賀町に移住されてからの取り組み等についてお話をいただくこととなっております。小堀様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願います。

それでは、小堀様、よろしくお願いいたします。

○**小堀陽平講師** 西和賀町の小堀です。きょうは岩手県議会にお呼びいただき、どういう場なのかさっぱりイメージができないままここに来て、ちょっとかたい場だと思いながらここに座っています。マイペースなことぐらいしか取り柄がないので、なるべくリラックスして臨みたいと思います。

基本的に大きく分けて二つのお話をさせていただきます。まず、前半に自分についてのお話、それから後半に地域で移住者を受け入れたりとか、これからどのように地域の持続可能性をたどっていくべきかについて、あくまで私の考えていることをざっくりばらんにお話させていただこうと思います。

私自身は基本的に演劇をやってきた人間で、本当に演劇のことしか勉強していないので、地域おこしもその演劇の思考回路を通してやってきたところがあるのですが、今回、人口減少・子育て支援対策調査特別委員会で、人口減少と子育て支援ということですから、基本的には地域おこしの側面からアプローチできればと思っております。あまり演劇の話がたくさん出すというよりは、地域おこし協力隊として、あるいはアートコーディネーターとしてこの1年何をやってきたかについてお話をさせていただきたいと思います。

まず、自己紹介ですけれども、1986年に東京都の西東京市、以前の田無市で生まれました。現在31歳で、ことし32歳になります。高校までは公立の学校を出まして、大学で日本大学芸術学部演劇学科劇作コースという、いわゆる戯曲や台本を書くコースの卒業で、三谷幸喜さんが先輩です。それから、大学を出た時に、ちょっとこれだとまだ世の中に出られないなと思ったところがあって、日本大学大学院舞台芸術専攻で芸術学修士の学位を取っております。

ちょっと家庭の事情で、論文を残した状態で大学院に1年間長く、3年間いまして、最後の2012年の1年を迎えようというところで、東日本大震災がありました。大学院の修士のときにかなり社会性の高い作品を研究していまして、社会問題を作品化するときどう

いうアーティストの態度や作品化の仕方があるのかというのを研究していた関係で、東日本大震災を無視するわけにいかなくなって、演劇関係者がやっていた復興支援事業にちょっとかかわる形で岩手県とのつながりができました。銀河ホールをもともと運営されていた、北上市で芸術工房というNPO法人をされている新田さんという方から紹介があって、西和賀町を訪ねることになりました。そこで現在もやっておりますギンガクという銀河ホール学生演劇合宿事業という事業の立ち上げにかかわって、その後企画を担うことになりました。企画を担って事業を立ち上げておきながら、2012年に東日本大震災があった関係で自分が生まれた東京都を離れてみてみようということを思い立って、2年間京都府で生活をしていました。京都府にいたときには、後半1年間は演劇のNPO法人に声をかけてもらって演劇の仕事をしていましたし、あとは龍谷大学でゲストの講師ということで、教育学や心理学を専攻している学生たちに演劇を教えるということをしておりました。

2014年に西和賀町地域おこし協力隊に着任しまして、昨年任期満了ということで、銀河ホールは専門の人材で回していかなければいけないだろう、専門の人材のポストをつくる、ついては小堀さん、そこについてくださいということで、今のアートコーディネーターというポストをつくっていただいて、現在アートコーディネーターとして銀河ホールで働いております。

一般社団法人ブリッジをことし3月に立ち上げました。これは、地域おこし協力隊で使える起業支援金という、その地域で起業する人に対して補助金が出るという制度がありまして、その補助金を活用してつくったものです。代表理事は妻が務めております。

ざっと自己紹介はこんな感じです。地域おこし協力隊として西和賀町に着任した理由等についてお話してくださいという事前のお知らせをいただいていたので、簡単にこれもお話しします。京都府にいたときに、まだ入籍していなかったのですけれども、妻がもともと、コンテンポラリーダンスという、割と何でもありのダンスを大学院まで学んでおり、その後京都府で就職していたのですけれども、改めて学び直したいということで、仕事をやめることになりました。京都府で生活していくのに収入が減ってしまうので、どうしようかということになって、西和賀町にその当時から、さっきお話ししたとおりにかかわっており、地域おこし協力隊を募集しており、地域おこし協力隊は生活費等々の面倒を国が見てくれますので、収入をふやすのではなくて、支出を減らしたらいいのではないかという発想で、西和賀町の地域おこし協力隊に応募して、京都府から岩手県に移住をしました。かかわりがあったので、正直言って落とされることはないだろうと思って応募をして、まんまと移住をしたということです。

そのきっかけになったギンガクがどういう事業なのかをまずお話ししたいと思います。お話しするに当たって、2016年に行った学生たちが演劇や美術の作品制作をするという冬の合宿の1分ぐらいのダイジェスト映像をごらんいただければと思います。

〔映像放映〕

○小堀陽平講師 多分何をやっているのかさっぱりわかりませんが、演劇の稽古

をしています。これは、全部銀河ホールの中で、これは、妻です。この人たちは美術の作品をつくっています。

これがもうちょっと本番に近づいたころのダイジェスト動画です。

〔映像放映〕

○小堀陽平講師 銀河ホールを使ってこのようなことをやっています。まず雰囲気をとって動画をごらんいただきました。

事業の概要ですけれども、ざっと箇条書きで書いております。まず西和賀町のような地域に銀河ホールという演劇の専用ホールがあること自体が全国的にかなり珍しいです。温泉旅館が発案の事業ですけれども、温泉旅館に泊ってもらいながら演劇専用の劇場施設で滞在制作をするという機会を、学生たちに提供しようということで相談されたのが始まりです。いまだにそういう形でやっているのですけれども、演劇のみならず、美術、ダンス、木工、デザイン、メディアアート等、複数のジャンルでさまざまなプロジェクトを町内で実施しています。

主催は、ギンガク実行委員会という実行委員会組織を西和賀町内につくってやっております。教育委員会生涯学習課が事務局で銀河ホールに事務室があります。実質銀河ホールの職員がやっており、私がおその立場になっています。そのほか、西和賀町の町内の方々がおサポーターとして参加をしてくれて、受付や弁当配達などを手伝ってくれています。

ざっくり言ってしまうと、西和賀町文化創造館で10日間から2週間ほど、夏と冬の2回合宿をやっているのですが、ほぼ貸し切りで使えます。当然、夏に成人式などを西和賀町でやっているので、そういう時にはそちらが優先になりますが、基本的には貸し切りで使っています。1泊3食つき3,000円という格安の金額で温泉旅館に滞在ができ、基本的には温泉旅館と劇場を行ったり来たりして、丸一日劇場で制作をして、帰って温泉につかることができるという事業になっています。

誘致の対象は、実績を持たないおおむね30歳以下の全国の若者と学生になっています。学生のうちから注目されているような方々もいるので、そういう人たちはほかのところで滞在制作や作品制作をする環境があるので、基本的には対象にしないという形にしています。

事業運営がちょっと特殊な形をとってまして、実行委員会内に町内の企画委員と町外の企画委員という二つのチームがあります。前者は旅館組合と基本的には生涯学習課で、滞在する学生たち、参加者の生活の面倒を見るというところを担っています。後者は参加者と同じ立場の町外の学生、若者で組織していました。今も半分していますけれども、要するに学生たちのニーズが非常につかまえやすいのと、参加の呼びかけを全国各地にいる学生たち自身がしてくれます。もちろんインターネットでSNS、ツイッターとかフェイスブックを通じて呼びかけをしていますけれども、基本的に後輩を連れてきたり友達に勧めてくれたりという形で、少子高齢化の激しい西和賀町になぜか20代の若い人たちがどんどん来ているという状況があります。

実績としましては、私を含めて計5人が移住してきております。きょうも後ろに傍聴で来てくださっていますけれども、西和賀町の新たな地域おこし協力隊2人もこのギンガクを通じて西和賀町に何度か足を運んでいるうちに、移住するという事で来てくれています。うちは子供も生まれたので、出産という実績も1人いるということになっております。芸術文化で直接的なある種の効果では、移住実績が大きいかと思っています。

先ほどの動画が2016年ですが、これは去年の2017年の冬合宿でつくられた演劇作品です。これは日本大学芸術学部の学生と早稲田大学の学生が組んでいるチームでつくったもので、銀河鉄道の夜をモチーフにした作品でした。

それから、これが美術の作品です。銀河ホールの横に附属棟でUホールという棟がありますけれども、そこの2階を使って、孤独をひたすら書いて、渦巻き状に張りつけ、孤独の空間をつくったというインスタレーションです。

それから、これがことしの、ついこの間やった冬の合宿での演劇作品です。これはいろんなところから集めた子たちでつくったチームでしたが、3人姉妹のサスペンス物をつくって、身体的にいろんな工夫をした演劇作品です。

こちらがことしの美術の作品です。さっきの孤独と同じ空間でやっているものですが、これは秋田公立美術大学の子たちが五、六人参加して、そのほかに仙台市や東京都からも参加があったチームでつくった作品です。こちらは終わりの形というテーマでつくられたものですが、ビニール等の素材、それから蛍光塗料などを使った作品でつくられたものです。最終日には演劇の子たちとこの作品とコラボしたいということになったので、ここで演劇作品の中から1作品選んで、公開稽古みたいな形で一緒に作品づくりをしました。

このギンガクをきっかけに、私は西和賀町にかかわり始めたのですが、かかわり始めたときは大学院生でしたが、考えていたことが幾つかありました。これは書いておりませんが、まず一つが、ネット上に西和賀町というコミュニティーをつくれるのではないかと考えました。私自身、西和賀町という場所を全然知らなかったもので、どこだ、それはという感じでかかわり始めたのですが、来てみたら非常に特殊な演劇の環境と歴史、文化を持っているところだったということと、今特にフェイスブック、ツイッター、それから最近だとインスタグラムとか、そういったSNSで若い人たちがネットワークをつくり、いる場所を特に選ばないという時代に入っていますので、インターネット上に、バーチャルというところとちょっと違うのですが、西和賀町でつながっているネットワークコミュニティーをつくれるのではないかと、それは、西和賀町はここにしかないけれども、西和賀町に来たことがあるという人たちのつながりが全国にできるのはちょっとおもしろい現象のような気がするので、そういうことはできるだろうということの一つを考えていました。

それからもう一つが、その当方で6,000人ぐらいの人口で、高齢化率が45%くらいだったので、そういう小さな自治体ではあれ、当然西和賀町の実社会です。特に演劇というの

は小さな文化ですから、東京で自分たちの知り合いの中だけで縮こまっているのではなく、小さな町で、実際の社会とかかわりながら、特に6,000人ぐらいの規模だったら何とかできてしまうのではないかという、ちょっと生意気なことを考えたりもしておりました。なので、最初から、ある意味、演劇とか文化でまちおこしをしようというよりは、まちづくりをしようみたいところがちょっとあったのが事実です。そんな志と言えば志ですけども、生意気な気持ちを持って西和賀町にかかわっていらしたので、よく京都府から引っ越してきましたねみたいな話をされるのですが、余り抵抗なく移住をしています。

移住してからこれまでにやってみたことをまとめてみたのですが、たくさんあるので、早口でいきます。まず、基本的なテーマとして自分が地域おこし協力隊として持っていたものが、まちをひらくということです。あれだけ山に囲まれていたり、いまだにももちろんありますけれども、非常に閉塞感がある。町の人たちが、自分たちが都会から遠いと思っているところもあります。それから、同じ人たちとしか毎日コミュニケーションをとらないということがあって、いいものがたくさんあるのにもったいないところがありましたので、まちをひらいていこうと。特に自分の目と言葉で西和賀町を知ることと、知らせることを大事にしようということをやまだに大事に考えています。

それから、地域にあるもので地域になかったことをする。結構西和賀町はいいものがたくさんあるのでですけども、やればいいのにできていないことがかなり多いのです。それは、僕らの後に来た後輩に当たる地域おこし協力隊も学生たちもみんな口をそろえて言うことです。その辺のことをテーマにいろんなことをやってきました。

2014年に着任したときですけども、まず、町のイメージを変えていこうということで、もともと情報誌としてあった元気な西和賀どっこむを着任2日目からレイアウトを切ってつくり直すという作業を始めました。湯田ダム、50歳。と書いてあるこちらが最初につくったものです。これは今なくなってしまったんですけども、まめでらが！と書いてあるこちらが最後につくったものです。やっていくうちにこれだけデザインも変えていってしまったというところがあって、最後、観光情報紙でも何でもなくなっていったんですけども、こんなものをつくりました。

湯田ダム、50歳。の内容はせつかく50年なのだから湯田ダムに注目してもらおう、それをただ湯田ダム50周年だと言ってもおもしろくなかったので、擬人化してナイスミドルと言ってみたりと、親しみを持ってもらえるように、その辺も遊び心をかなり持つてつくりました。

この年の冬につくったもので、こちらが深沢晟雄村長の特集をしたものです。これもわざと親しみのあるフレーズを使ったりと、結構町の人たち向けにある種メッセージとしてつくったものがありました。地方自治は民主主義の学校だというところから引用していますけれども、半世紀前ここには本物の民主主義の学校があり、深沢晟雄自身というよりは、その周りで支えていた人たちがいて、村ぐるみでやってきていたはずだということをやここでちょっと発信したりとか、そんな形で西和賀町のイメージというのを少し内部としても

変わってもらおうということを考えながらやってきました。

それからこちらが町のファンクラブ会員向けの会報誌です。こちらはどっこむと違ってターゲットが絞られているので、会員の方にお送りするのが基本で、あえて内容を絞った形でやっています。同じくこちらのにしわがfanは子供がヨーグルトを食べさせられている写真です。ちなみにこれは妹一家で、使えるものは何でも使おうということで、湯田ヨーグルトを送りつけて写真を撮ってくれと言って撮ってもらいました。このテーマは、西和賀町のものを買ってくれた人たちのことを想像してみませんかと呼びかけをしたものです。なので、ちょっと小さいのですけれども、どんな人たちがどんな思いで買ったのかということも大切にしたいということが書いてあります。双方向のやりとりを、西和賀町にいるからわからないのではなくて、ちょっと想像してみませんかということでした。

その隣にあるものが最新号ですけれども、途中から趣旨を思いっきり変えて、西和賀町のわたしの話ということで、西和賀町に住んでいる、特に有名でも何でもない普通の人たちにインタビューをして、どのようにここの町で暮らしてきたのかということ発信しようということをつくったものです。個人誌なので、載せられる、載せていいのかみたいなところを行政から言われるところはあるのですけれども、意図としてはやっぱり西和賀町に移住を呼び込むのにどういう暮らしがあったのかということ、それぞれが個人レベルでどういふことを感じながら暮らしているのかをお伝えしようと思っつつくっているもので、今も一応続いています。途中から委託業務で、仕事の一部ではなく、別でお金をもらえるようにしてもらいました。

それから、ギンガクは、当然夏の合宿、冬の合宿を続けていたのですけれども、それ以外に2014年に西和賀高校美術部とアニメーションをつくるということをやりました。西和賀高校美術部は正直言って帰宅部だったので、みんなイラストを描くのが好きで入ってきたという感じでした。大体イメージができると思うのですが、アニメーションは絵をたくさん描かなければならず、何百枚、何千枚、2時間物の映画になると何万枚になります。たくさん絵を描けばうまくなるだろうという単純な発想から、一緒にやってみないかということで行きました。3分ぐらいの作品でしたが、非常に大変でした。やっぱり800枚か、1,000枚近く描いた覚えがあります。

まずこんなことを始めて、2014年は銀河ホールではなくて、政策推進室という部署で仕事をしていて関係で、こういう広報とか発信関係が多かったのですけれども、2015年から銀河ホールに移りました。

2015年の5月に結婚をしました。妻がダンスを神戸市で学んでいた関係で、1年おくれで西和賀に来まして、西和賀に来たタイミングで5月に入籍をしました。これは地区でサプライズパーティーをしてくれたときの写真です。この日あけとけと言われて、何のことかわからずに2人で行ったら、宴席が設けられていたということでした。

それから、生涯学習課の教育委員会の事業で、私たちが住んでいた左草という地区で、廃校活用をしています。町で唯一の廃校活用施設がありまして、そこで春夏秋冬に教育委

員会が自主事業をしています。その担当に据えられたので、このときは子供たちに地図づくりをしてもらおうというプログラムを1年間やりました。これは山菜が見えているのでおわかりかと思いますが、春の事業です。町内外から、基本的に北上市の和賀地区と町内の子供たちが集まって、泊まりだったり日帰りだったりというフィールドワークのようなプログラムをやっているのですけれども、このときの地図づくりの様子がおもしろかったので紹介します。

〔映像放映〕

○小堀陽平講師 これは、午前中にフィールドワークをして午後にポスターを張り合わせた大きな紙を用意して、その紙の上に共同作業で書いてもらうということをやりました。子供たちの目を通して、逆に大人たちが発見をすることを狙ってやったものです。かなり文化的な感覚でやったものですが、結構おもしろかったです。こういう子供たち向けの授業も担当してやっておりました。

それから、この左草地区のちょっと山に入ったところに古民家があって、もともとギンガクを始めたころから何かに使えるといいねと言っていた家だったので、こちらに移住をしました。最初は、廃校になる前の左草小学校で使われていた教員住宅に住んでいたのですが、前から使わせてほしいみたいなことを地域の方に相談して、相談しっ放しになっていたので、自分たちで住むわということで、住みました。地域おこし協力隊は家賃が出るのですけれども、その家賃を大家というか、持ち主の方が家賃は要らないと言ってくれたので、では家賃分の金額を協力隊の任期満了まで積み立てて、それを改修予算に充てようという発想で改修をしました。テレビ番組のビフォーアフターではないのですが、ちょっと暗いですが、最初はほこりっぽくて大変だったところを、かなり住める状態にしてきれいに直してもらいました。直してくれたのは私の父です。私の前にいる白髪の方とその隣の方は大家さん御夫婦で、その横は父です。父に最初は相談だけするつもりだったのですが、建設会社を個人でやっていたので、家を建てる道具をみんな持っているということで、自分が直すから7月の予定をあけておけと言われて、東京からわざわざ、軽トラックできて2週間ここに泊まりこんで家を直してくれました。ちなみに、西東京市議会議員をやっているのですけれども、スケジュール的に大丈夫なのだろうかと思いつつながら、地域の方々からは、おまえのお父さんはすごい人だからもっと尊敬しろとさんざん言われました。

それで、この年にギンガクで地元の事業者の方のポスター制作を新しいプロジェクトとして始めました。学生たちに合宿の前に事前に取材に来てもらって、さっきのにしわがfanにちょっと近いのですけれども、地元の方のストーリーをたくさん聞いてもらって、それをポスターにするという事業をやりました。これは芸術文化協会の会長ですが、この頭を染められている人のお店です。美容室をやっている方で、非常にキャラクターの強い方なので、この人にまずポスターになってもらおうということで、ポスターになってもらいました。変わった人がいで、いいのよというコピーを学生が考えてくれました。こ

これはあくまで一例で、七つぐらいシリーズ広告みたいにポスターをつくってくれたのですけれども、今のところ、六つか八つぐらいの事業者さんのポスターを制作しています。行く行く、西和賀ポスター展みたいなこともできるといいねというところが企画の一応の着地点というか、目標になっています。

それから、西和賀町で戦後からずっとやっている西和賀町の演劇文化をつくってきた劇団ぶどう座に私と妻も入りました。これは銀河ホールの地域演劇祭に出演した写真です。このときには福島県の方が書いた古い芝居の作品をやったのですけれども、福島弁がみんなしゃべれなく、私が特にしゃべれないということで大変でした。

それから、この年から中学校での演劇指導も始めました。西和賀町は銀河ホールを中学生に使わせて、稽古と本番の両方使わせるという、すごく豪華な文化祭をやっています。沢内中学校は学校の体育館でやっていますが、湯田中学校がそういう恩恵にあずかっています。各学年に講師がついて、演出もしてくれるというか、演出指導もしてくれるということをこの3年間やらせてもらいました。持ち上がりで、この子たちがこし卒業したので、またこし1年生から始まります。毎年10月に2週間ぐらい、学校と銀河ホールで稽古をします。これは木下順二さんで夕鶴を2年生のときにやったので、この次の年にやったのですけれども、このような舞台をつくったりしています。

それから、先ほどもちょっと御説明しましたが、ギンガクのこの年の冬の合宿から受付だとか弁当配達等していただける町内のサポーターが発足しました。これは歓迎会のときの写真ですけれども、非常に皆さん楽しんで参加をしてくださっています。もちろん予定がそれぞれあるので、都合のつく日しか来られないというのが基本ではあるのですけれども、いい感じに学生たちを迎え入れてくれて、みんなお帰りなさいと言って迎え入れてくれることがあってギンガクはリピーターもいますし、移住者も生まれているという状況があります。

2016年に入りまして、実は盛岡市の盛岡劇場でもお芝居をやらせてもらったりしていました。2015年にもちょっとやらせてもらったのですけれども、このときには盛岡劇場の8時の芝居小屋という平日の夜8時から芝居をやりますというプログラムで、何かやりませんかというお誘いを受けて、妻が勝手にやると返事をしてきました。何も予定が決まっていなくて、人が集まっていないのにやると言ってきたというので、大変な思いをしながらつくりました。しかも、やると言った本人が、最初出るつもりだったのですけれども、妊娠が発覚して出られないということになって、それで急遽出てくれる人を募集したら、また妹なのですけれども、うちの妹が出ると言ったので、結果的に本番の直前は妹一家と、プラスなぜかうちの母親までのみんなで、古民家に住み込みで稽古をしていたという状況がありました。

最初、妹とぶどう座の菊池啓二さんという俳優が出るはずだったのですけれども、本番の2日前に過労で倒れてしまって、おじいさん役だったのを無理やりおばあさん役に変えて、結局妻が出たため、車椅子に座っている写真があります。そんなばたばたの中、盛岡

で公演をしたときの写真です。大変でした。演劇をつくるのは大体1カ月ぐらいかかるので、ギンガクの準備などをしつつ、ほかの仕事もしながらやってきたという感じになります。

それから、こちらがさっきの左草館の廃校活用で、夏休みに京都府の劇団に来てもらって、廊下で公演をしてもらったときの写真です。廊下でしてくださいと言ってはいないのですけれども、来た本人たちが廊下を使ってやりたいと言い出したので、ではどうぞということでやっていただきました。これも地域の方々合わせて50人ぐらい集まったプログラムになりました。

それから、秋にギンガクに参加した仙台市の学生が、今度国際ダンスカンパニーの公演に参加するが、ギンガクに参加していたら、仙台市での稽古場を確保し損ねたと言ってきて、西和賀町で40日間ほど滞在制作ができませんかと言われました。何の予算もなかったのですけれども、地域の方に相談して、公民館で稽古をさせてほしいということと、それから空き家を使って滞在、滞在制作をさせてもらえないかということとを相談したら、いいですよということで受け入れが可能になりました。これは9カ国のアーティストが参加してやった公演だったのですけれども、右上の写真は公民館で稽古中に障がい者施設の方々が見学に来て、ちょっと一緒にセッションというか、対応をしてもらったときの写真です。それから上のもう一つの写真が銀河ホールでワークショップをしてもらったときの写真です。アーティストも合わせると50人ぐらいの方々と、舞台上で少しアフリカダンスをやったりとか、いろんな体を動かしたりというワークショップをしました。一番下の集合写真が、仙台市での公演のときに、受け入れをしてくださった地区の方々がみんなで見に行ってくれて、そこで撮った集合写真です。こんな形でちょっとコーディネートして国際的なところとかかわりをつくったり、さっきの夕鶴の中学校の演劇講座をつくりながらやっていました。

それから、ギンガクの冬の合宿の最中に、こちらは東京都の若手の劇団、アジアでかなり活躍している範宙遊泳というグループの作品を銀河ホールでやってもうらおうということで、鑑賞事業としてギンガクの合宿にぶつける形でやったものです。この後もう一つ紹介しますが、仙台市の劇団もこのとき同時に呼んで、ギンガクをやりながら二つの劇団の鑑賞事業をやりました。町内の日帰り温泉に張ってあったものなのですけれども、この人たちの上にあるものは町の人がつくってくださったポップです。西和賀町でやる前にこの作品をニューヨークでやっていたのですけれども、ジャパン・ソサエティーという日本の現代芸術を紹介するセンターで紹介されて、その後、岩手県にそのまま来て、なぜか西和賀町でニューヨークからの凱旋公演をしてくれるという流れになったものです。

下の写真は、公演の前日に中高生向けにワークショップをしてもらったときの写真です。これも20人か30人ぐらい参加者が集まりました。

もう一つが劇団短距離男道ミサイルという仙台市の非常に今乗りに乗っている劇団です。このときには太宰治の人間失格を題材にした作品をつくって、真冬の東北をキャンピング

カーで回りたいから西和賀町にも行きたいと言ってくれました。ここの劇団員もさっきの動画に出てきたギンガクに参加した人が一人いて、そんなつながりからこういう申し出がありました。このときには、ちょっと不穏な言い方ですけども、せっかくミサイルなので、北からちょっと飛んできてもらおうみたいなところがあって、沢内で公民館2カ所、それから最後に木造の小劇場でぶどう座の稽古場というところがあるのですが、そこでやってもらうということで、町内3カ所のツアーをやってもらいました。30人お客さんが集まれば万々歳だと言っていたのですけれども、結果的にどこの会場でも50人ぐらい入って、150人ぐらいの集客になりました。後でまだ紹介するのですが、彼らはこの作品でインターネットの投票で全国1位をとって、次の作品でまた西和賀町に来て、それはそれで日本演出者協会というところでやっている全国コンクールで1位をとったりしています。なので、呼べてよかった鑑賞事業の一例です。

この年に、第1子が誕生しました。生まれただです。1月生まれでしたが、出産は東京都でもらいました。さっきの古民家に住んでいたところだったので、ちょっと山の上に入るのに妊婦とか子供を抱えて山の上に行けないということで、冬の間、妻には東京都に行ってもらっていました。

それから、ギンガクでもう一つ新たに始めたのが、きょうも来ている、地域おこし協力隊になった高野さんというこちらの女性に、西和賀高校美術部へのデッサン指導というのを何回かやってもらいました。西和賀高校には美術の先生もいないので、こういう基礎的なことを教える人材がいなかったということもあり、ニーズがあったので、彼女に年に何回か来てもらってやっているうちに移住をしてもらえたという形になります。

昨年度に入りまして、2017年からアートコーディネーターという立場に変わりました。文化創造館アートコーディネーターって実際何をやっているのかというと、基本的には事業担当です。銀河ホールでやっている事業、演劇関連の事業とか舞台関連の事業で、昨年度は大体予算が合計で1,000万円ぐらいという、劇場としては非常に小さいのですけれども、中学校の演劇講座だとか、それから地域演劇祭鑑賞事業、ギンガク、あとこの後紹介しますが、町民劇等々、基本的にはいろんな事業を全部担当しています。

こちらは仕事とは別に、劇団ぶどう座に入った関係で、ぶどう座の方々が僕らを除くと若手が60歳代になってくるので、いかげん世代交代をしないと劇団が危ないということもあって、地元の高校生たちに参加してみないかということで、昨年度の地域演劇祭から何人かの子たちに参加してもらって、世代交代に向けたアクションをちょっと起こしているところです。西和賀町の芸術文化団体は、ほかの踊りとか鬼剣舞とか伝統芸能系は結構子供たちがバランスよく参加しているのですけれども、こういう演劇、詩吟は、好きでやっているものに関しては続いている部分があるので、ここら辺をちょっと介入しているところです。

それから、きょう皆さんのお手元にお配りしている小さなリーフレットですけども、新たな町民劇ということで銀河ホール演劇部を発足しました。これは、西和賀町は西和賀

町民劇場というのを2年間ほどやっていたのですけれども、外部から講師を呼んでやっていて、正直言って、講師と先生という形になってしまって、主体性が全然なく、非常に従順な町民劇場になってしまったので、いまいち演劇として効果が出ていないということがあって、この銀河ホール演劇部ではまず本番をやることを決めるというのではなくて、活動ありきでやりましょうということとしました。それから講師は呼ばない、自分たちで全部つくるということをコンセプトにやりました。広く募集を呼びかけたのですけれども、どういうわけか中高生が中心に集まってきて、中高生の子たちで台本も書き、それからプロダクションの部分、いわゆる公演制作というのになるのですけれども、予算の組み方とか、領収書の管理だとか、それから広報、チラシ、ポスターの作成、それからチケットをどこに置いて、どう売るとかということも全部自分たちで考えてもらってやった公演です。もちろん私のほうで演出的な指導とか、最初のガイダンスとか、あるいはプロの演劇を見せて、演劇ってこんなことができるということはやったのですけれども、非常にみんなよく頑張っていて、それから親たちにもちゃんと応援してもらって送り迎えをしてもらいながら、1月27日、28日に公演をしたということです。公演のときの写真はお手元にありますが、後でまた出てきます。

それから、去年の7月にさっきの古民家から銀河ホールまで徒歩5分のちょっと住宅地の駅に近いところに引っ越しをしました。子供が大きくなってきて、7月になると西和賀町は山の中が虫だらけになってしまうので、さっきの環境だと車に乗って帰ってきたときに、アブに囲まれるということ子供に乗せおろしができないことや、シロアリが出たとかいろんな諸事情により便利なところに引っ越ししました。非常に地区の方々からは残念がられたのですけれども、今はこちらで暮らしております。

それから、去年の夏に、ギンガクの夏合宿とほぼ同じタイミングで、西和賀町としては初めてのインターネットのクラウドファンディングによる資金集めで何かプロジェクトを実施するというものに挑戦をしました。これがクラウドファンディング第1弾となっていますが、やはり廃校活用で、西和賀高校でのアニメーションづくりからの派生ですけれども、アニメーションの作家さんを10人ぐらい呼んで30作品ぐらい上映をするということをやりました。80万円の目標でお金集めをして、80万円弱までで、達成はしていませんけれども、お金が入る形で呼びかけをして、予算を組んで実施することができました。上映のほかにワークショップもしたり、それから作家たちとお話ができるという場をつくったりといったことで、Video Party in 西和賀というタイトルでやりました。

それから、それに味をしめたわけではないのですけれども、クラウドファンディングの第2弾ということで、高校演劇の大会もやるぞということで、これも実際に実施をしました。後でまた本番のところのスライド出てきますので、そこでちょっと内容を説明させていただきます。このときは180万円のクラウドファンディングで、達成しないとプロジェクトができないという厳しい条件のものでやりましたが何とかなりました。

こちらは、さっきの短距離男道ミサイルの町内ツアー公演の②です。今度は走れメロス
を題材にして、心揺さぶる自虐活劇と書いてありますけれども、タイトルを走れタカシに
かえて本人たちの話をしました。この劇団はいつもそうなのですけれども、かなり肉体を
酷使するタイプの劇団で、このときにはこの狭い空間でどうやって走るのかという、ル
ームランナーが出てきて、ルームランナーの上でひたすら走りながら芝居をするという公
演を町内3カ所でやってもらいました。このときは銀河ホールの舞台上と、それからこの
写真が農機具小屋なのですけれども、農機を一回片づけて、そこに舞台をつくってやった
のと、それから碧祥寺でやらせてもらいました。

それから、こちらがギンガクでのアニメーションのワークショップですが、平面の絵を
描くアニメーションではなくて、粘土のクレイアニメーションです。これは本人たちがつ
くったものです。

〔映像放映〕

○小堀陽平講師 こういったものをちょっと体験してみるというワークショップをやり
ました。アーティストが iPad を借りてきてくださって、簡単に体験できるアプリをイ
ンストールしてつくったものです。こういったものを西和賀高校の美術部の子たちに体験
させて、西和賀町でも体験できるよということで、アーティストと引き合わせをしてコー
ディネートをやっております。

それから、これが銀河ホール演劇部の旗揚げ公演の様子です。リーフレットの写真をそ
のまま張ったものなので、よければ本のほうを見ていただければと思います。これも舞台
上に白いパンチカーペットを敷いて、挟むような形で客席をつくって上演をしたものです。
ごらんの通りみんな若いメンバーで、西和賀町らしからぬ感じの場所になっていますけれ
ども、大体50席つくったのですが、2日間やって両日とも60人入ったので、120人の方々
が集まってくださいました。

それから、こちらがさっきのクラウドファンディングを第2弾でやった、いわて銀河ホ
ール高校演劇アワードという大会です。全国で初めての仕組みの大会で、何が初めてか
という、台本が一つで同じ作品を5校がやるということで、演出の勝負をするという大会
をやりました。なので、タイトルが細かい字で書いてありますが、何を言うかは、台本が
決める。言いたいことは、わたしが決める。というキャッチコピーで、この冬、銀河ホ
ールが高校演劇を変えますと大きく出てっております。

銀河ホールは昨年度から一応スローガンを決めて、どこにもない演劇のまちをつくろう
というスローガンでやっていた関係もあって、どこにもない大会が何かできないかとい
うことで、思いついたのは去年の5月ごろだったのですが、一度県のほうの若者文化振興事
業費補助金という補助金を申請して、採択してもらえなかった関係で、クラウドファン
ディングで予算をつくってこれになりました。やってみたら、西和賀町のほうで当初予算を
来年度はつけてくれたので、来年は西和賀町の予算を元手にやれることとなります。

先ほどの範宙遊泳という、国際的に注目されているグループの作家に書きおろしをして

もらいました。要するにプロの書きおろしの台本で5校が競うので、既存の古い台本ではなく、全くの新しい台本を自分たちのために書きおろしてくれましてというところで演出勝負をするということです。同じ台本でつまらないのではないかという心配の声もあったのですが、ところが、どこも演出が違って全然飽きない。というか、むしろ全部見ないとおもしろくないという大会だということが判明しました。今回の参加は大阪から2校と岩手県内から3校、西和賀高校も特設演劇部という形で参加をしました。

もう一つは、高校の演劇の大会は、表彰の機会が非常に少ないので、表彰の機会をふやそうということもあってアワードという形をとっています。ちなみに、ギンガクの雪の演劇祭という演劇の大会は、基本的には表彰はなく、つくることにとにかく集中してもらおう、好きにつくってもらおうということをやっているのですが、その辺でちょっと趣旨が異なるのですけれども、あえてこちらは結果が出る大会にしております。

最後に、先ほどの一般社団法人の設立ということで、一般社団法人ブリッジをつくりました。最初にお話した、どういうコンセプトでこういう活動をしてきたかというところが相変わらずつながっていて、目的のところは、当法人は人と人をつなぐ、場をひらく、ともに考えるを軸に、文化活動に親しむとともに学びを活かす社会を目指すということが書いてあります。100万円の補助金があるので、100万円でiMacという高いパソコンを買いました。最初にお話したとおり、デザインをつくることもやっていますし、それからそろそろ編集ができる環境が西和賀高校のアニメーションで必要だということで、彼女らに場を提供する意味でも、こういうものを買わせていただきました。早速、編集ソフトの勉強をしている様子です。見てみたらさっぱりわからんということで、まず絵を描いていきますと言って、これ以降来ていません。これから頑張ると思います。

それで、子育て支援ということだったので、一応娘の進捗ということで保育園に数日前に無事入園して、きょうからお昼御飯も保育園で食べて帰ってくることになっています。こんな感じに成長しております。長々と早口で話しましたがこれが一応これまでやってきたことです。

これからやらなくてはならないことですが、まず劇場なので、よい作品や創造の場をつくるということです。芸術家を対象にするのかという話になってくるのですけれども、町民劇場なんかを岩手県は盛んにやっているところがあるのですが、基本的にはよい作品、よい創造活動というものが保障されていないといけないと私は考えています。単純な話で、参加することに意義があると考えがちなのですが、何に参加することに意義があるのかということです。やっぱりいいものをつくる、クオリティーの高い活動に参加するということが学びがあると考えています。ぜひリーフレットの中高生たちの作文を読んでいただければと思うのですが、特に演劇は人づくりに非常に役に立ち、コミュニケーション能力とかいろんな力が身につきますので、そういう意味ではよい場をつくるということが大事だと思っています。

それから、劇場から地域をひらく、町・県・北東北と書いていますけれども町立施設な

ので、つい町民たちのためにということを経営としては考えがちではあるのですが、まず西和賀町の人口が減っていて、だから、町民たちのためにと言っても町民がそもそも減ってしまっている。特に西和賀町の文化創造館は、合併前の湯田町のと看につくられたもので、町の真ん中に施設がないことから、沢内地区の人たちから非常に遠いのです。なので、さっきのミサイルの公演をやっていた意図は、町の人たちを相手にするといっても、出張したほうが町の人たちのためになるということで、我々自体が地域の中をひらいていかなければいけないし、それからこのギンガクで移住者が出ているということもそうですけれども、劇場という場所は人が集まる場所ですし、繰り返し来る場所なので、そこをある種の窓口、玄関口にして地域をひらいていくことが可能であろうと考えています。そういう意識を持たなければいけないので、行政職員は当然ですけれども、町民の方々もそうですし、町という単位で、自分たちが町であるということを見ながら、西和賀町をどうひらいていくかということを見かなければいけないと考えています。

それから、若い世代の人生の可能性を広げるところですけれども、町に若い世代を残したがるのですが、どちらが可能性を広げるかを単純に考えれば、志があつてそれをする分には別に構わないと思いますが、例えば西和賀高校を出てすぐに就職する、その後大学に行く、大学でいろいろな地域の人たちと知り合うとか、そういう広がりを見ると、個人的にはあまり地域にとどめておくというのめかわいそうだと考えていますし、それから我々がよそ者として入っている部分で、広げられるものがあるだろうと考えています。きょうはアニメーションの話がたくさん出てきたと思うのですが、そういうものも、町の中にいるだけでは得られないものを、我々よそ者が持ち込むことによって、こういう世界があるというのを直接的に紹介できるので、そういうことを西和賀町でも体験できるのだというところて、これから何十年生きていく若い世代の可能性を広げてあげることが大事だと思っています。

こういったことを銀河ホールとして、あるいは法人としてどう事業に落とし込んでいくかというところて、具体的にいろいろな計画はあるのですが、大きなテーマとしてこういった三つのことを考えてやっております。

それから、芸術文化が専門なので、芸術文化がいかん人育てるのかを御説明したいと思います。ギンガクの参加者や銀河ホール演劇部の参加者が一体何を学んでいるのか、演劇を通じて何を学べるのかというところを参加者たちが非常にいい作文を書いてくれているのですが、何となく個人的にまとめるとこういうことかと思っています。

まず、演劇づくりそのものについてですけれども、演劇は正解のない集団的な創作活動です。演劇に限らずダンスなんかでもそうではあるのですが、演劇というのは言葉も体も使うし、あらゆる要素を使うという意味で総合的、統合的な芸術活動です。客観的に明らかな結果やゴールはないです。つまり勝つとか、何か点数をこまでとるとか、そういう明らかな結果がなくて、みんなで話し合いながら結果を考えていくというところがあります。それから、作品が物質的なモノではなくてコト、現象とか体験という形で共有

されるものです。だから、やってしまうと後でなくなってしまうというところがあります。重要なのが表象を用いる、表象という言葉は余りふだん使いませんが、要するに概念ですよ。例えば日常生活でわかりやすいのは恋人だと思います。僕とこの人が彼氏と彼女だということって、基本的には言葉でしか成り立っていない。だから、私たちが何者であるのかということが言葉によって決まってくるということと、演劇とか文化、芸術の関係者は表象というように言うのですけれども、そういう言葉によって何者であるかというのを用了表現だということです。だから、約束事の中でしか成り立たないということが重要なポイントだと思っています。

そういう実際にはない世界、つまり虚構を成り立たせなければならないので、その集団の中で共通言語とか共通認識をつくっていく作業を演劇づくりでは行います。その実際にはない虚構の世界をいかにお客さんがちゃんと信じられるかの質にこだわることで、何がオーケーで何がNGなのかという、集団の中でのルールとか規律ということが自発的に理解できるようになってきます。これは銀河ホール演劇部の参加者の作文で、中学生が結構そういうことを平気で書くようになるので、非常に個人的には職員研修で復活させてほしいと思っています。演劇体験は人づくりに非常に役に立つものだと思います。

それから、演じるという行為についてですけども、演じるというと自分が何かのふりをするとか、見せかけをつくるとかと日常的には使われがちですが、ちょっと分解するとこんなことだというのがこちらです。自分たちの振る舞いがどのように成り立っているかを意識化、行動化し、そのような嘘とあえて書いていますけれども、作為によって本当のコミュニケーションを試みる行為。つまり自分たちが何者なのかということ、役を演じるときに考えなければいけないのです。役者というのは、演じる役と、自分自身、演じる役者としての意識を両方持たなければいけないのです。ちょっとややこしい話ですけども、普通に考えて、登場人物というのはその次に何が起こるかということをおぼえていないので、生きている時間軸が違うのですけれども、役者は次に何が起こるかということをおぼえてはわかっている。だから、わかっているがわかっているふりをしなければいけなかったりして、それがどうしたら本当に見えるかということをおぼえて意識化することが演じるという行為です。演じることができるようになるというのは、自分が何をしているかということをおぼえて理解し、行動化し、周囲に伝達ができるということです。なので、例えば僕がここでパントマイムで水を飲んでみますみたいなことを何も言わずにやって、それを皆さんにおぼえてもらわなければいけない。このコミュニケーションって非常に高度なことです。そういうことができるようになるというのは虚構上の舞台の物語の中での人物としてではなくて、実際にそういうコミュニケーションがとれるようになるということなので、コミュニケーション能力が向上する。劇ってコミュニケーション能力の向上に役立ちますよというのはつまりこういうことだということです。人にわかってもらえる能力が非常に高くなります。そして、相手のこと、自分のことをおぼえながら力が非常に高まるものだと思います。そして、芸術文化で何ができるかというのは非常に難しい問いで、そして成果がすぐ出な

いのですが、人を育てるという効果としてこういったことが言えると思います。

では、ここから地域の話に入りたいと思います。1時間たってしまい済みません。前半と言ったのに話がたくさんあり、やっぱりおさまらなかつたと思いながらしゃべっています。

西和賀町が誇るべきことについて簡単にいきます。圧倒的にヘルシーだと思っています。自然環境、それから食べ物、そして集落単位の生活が残っていることは、さっきの国際ダンスカンパニーの方々から言われたことですが、グローバル企業がほとんどない、コンビニがないとか、人の生活を満たすようなものが余らないということで、非常にヘルシーだということを言われました。

それから、そのことが影響していると思いますが、子供たちが賢いです。ふだん大人というか、上の人たちとも普通にコミュニケーションをとっているので、普通に大人と話ができちゃいます。東京の子供たちのほうがそういう意味では結構危ないと思います。自分たちのコミュニケーションしかできない、自分たちの世代での話のことしかできないというところがあるので、西和賀町の子供たちは非常に賢いと思います。ただ、ちょっと惜しいのが、同じ人たちと同じフレーズでしか話をしないので、語彙が少ないということに最近気がつきました。

それから、高齢者が元気だと思います。非常に何でもできてしまい、ちょっと我々が見ている、こんなにできるようになるのだろうかと逆にプレッシャーを感じ、心配になるぐらいです。高齢者といってもみんな元気な人たちだと思います。

逆に西和賀町が改善すべきと思うことですが、これはちょっと悪口のように思われる気がして怖いのですが、ざっくばらんに正直にいきたいと思います。

まず、インターネット、デジタル化の理解が非常におくれています。これは地域を滅ぼすと思います。光回線を全戸に入れるとって過去に補助金を使ってやったのですが、ほとんどラジオとしてしか使っていないのと、新規で入ろうとするとその端末を入れる引き込みに5万円かかるのです。これは、それこそ移住、定住を妨げます。後でもちょっと話をしたいと思いますが、とにかくそれを使っての商売という感覚がないので、きのうもテレビに西和賀町を取り上げてもらいましたが、いまだにファクス、電話がメインで、対応は全部ファクス、電話なのです。だから、メールでの受け付けとか、そういうことができる人がいないというのが危ないと思っています。

何だかんだいっても男性上位が非常に目立つと思います。役場の中でも課長職が女性の方1人で、ことし課長代理で女性の方が一人出てきたかな。ただ、議員の中でも12人いて女性が1人という状況もありますし、どこか地域の中で男性のほうが、上という言い方がちょっとあれですけども、ちょっとこれは気になるころはあり、よそから人を呼んだときに、正直言ってこれも言われます。ちょっと女性を軽んじているということ言われるので、意識しなければいけないところなのではないかと思っています。

それから、行政としてはスクラップ・アンド・ビルドということは今すぐ言っている

のですけれども、要するにいろんな事務機能を民間におろしていきたいというか、住民の方々に担ってもらえないかということを考えているようなのですが、この担い手がいないというところなんです。NPO法人とかそういったものが非常に少ない。若い人たちの新しい仕事、インターネットのことも含めてですけれども、つくっていく意味でも地域に担い手を育てていかなければいけない。何となく住民対行政とか、地区対行政みたいな構図になっているのですけれども、個人的には、廃校活用もそうなのですけれども、法人を立ち上げたところの一つの意図はこういうところにあります。そこら辺が今不在なまま行政の事務をスクラップしていくというと、もうどんどん町が痩せ細っていただけだなというのをちょっと感じています。

最後に、古い時代感覚で条件不利地域ぶってはいけないというところなんです。これもインターネットの時代ということが一つと、それからさっきのヘルシーさというものを海外の人が特に求めてくるというところがあるので、これも何となく東京との距離感覚だったりとか、心理的な距離感覚で条件不利だと思っていたりとかしてはいけないと思います。御存じだと思いますけれども、特に西和賀町はアクセスがいいです。県道と国道との丁字路になっていて、幹線道路が町の中を貫いていて、鉄道が通っていますし、高速道路も通っています。鉄道で言えば東京から乗りかえ1回で来られますから、アクセスがいいです。そういう意味では条件は不利ではないので、もっと条件不利で頑張っている地域はほかにもありますということは訴えたいと思います。

とにかく問題は持続可能性なので、今とかこれまでの感覚ではなくて、やっぱりこれからの感覚で地域のことを考えていかないといけないと思います。そういう意味で、特に大きいのはインターネットだと思います。

それから、移住定住促進についてですけれども、サブタイトルの的にひととしてひとに寄り添うしかないということを書いているのですが、政策提言というよりは、これに尽きるなと思っているところがあります。全国各地に視察にも行かせてもらいましたが、いろんな自治体があるような取り組み、仕組みづくりをしていますけれども、やっぱりこれに尽きるということを感じます。

項目を立てていますけれども、早速、ネット環境がなければもう誰も住みませんということなんです。これは必須だと思います。

それから、住ませたい人たち自身がそこに住みたいと思っているかどうかというところなんです。住んでほしい、住んでほしいと言いながら自分たちは出ていきたいと思っているというのは論外なので、それはやめてほしいと思います。それは芝居のチケットを売るのも同じなのですけれども、自分たちが見たい、おもしろいと思っているものでないって売ってはいけないと同じで、自分たちがここがいいと思っていない以上は住ませたいと言っ

てはいけないと思います。

それから次はきついですが、定住、永住、結婚、出産の期待はハラスメントだと思います。これもですけれども、自分だったらどうかということと、基本的に私のような人間は

自由意思で移住してきます。つまり自分たちの人生は自分たちで決めたくて移住してくるので、ここに来て一生ここにいるんでしょみたいなこととか、いつ結婚するの、いつ出産するのみたいなことを言われるのは、人に人生を決められてしまうので、ちょっと違うと思います。もちろん行政サービスとしてそれがいつでもできますという対応をするのは別の話ですけども、結構地域全体でセクハラをしている感じはありますので、これは気をつけたほうがいいのではないかと思います。

最後、命令形ですけども、来てほしかったら会いに行けというところがあります。例えば移住の相談が来ます。そのときに、それこそ遠方にいればいるほど、では私が行ってガイドンしますという場合と、来てください、ガイドンしますからといった場合、印象が全然違うはずで。だから、ギンガクの参加者募集も、基本的には会いに行ったときに、その後に合宿で直接西和賀町に来てくれる確率が一番高まります。だから、そういう意味でも、どういう行政サービスがうちにはあって、安心して暮らせますよということよりも、まずそこに行って頼れる人がいるかどうか大きいということを皆さん肝に銘じてほしいと思います。やっぱり自分だったらと考えると、例えば全然知らない九州とか、名も知らなかったような町に地域おこし協力隊として入りましたとって、誰も知り合いがないとか、まして運転免許を持っていないなんていった日には、その日の晩御飯からどうしようかという話になるわけです。そのときに頼れる人がいるかどうかということがまず大事になってくるので、その辺を正直言って、町内で生まれ育って役場職員になったとか、そのまま暮らしている地域の方とかはつかみ切れていないと思います。

そこら辺も含めて最後に、創造性が地域をひらくという話をさせていただきますが、まず消費者ではなく生産者としての振る舞いを伸ばしていくというのがこれからの時代は大事になると思います。特に西和賀町のような地域の場合、従来の経済感覚、経営感覚にのっかって、何に価値があるかということを追いかける、消費者として追いかけるのではなくて、もう場所を選ばない時代に入っているので、新たな技術とかネットワーク感覚に強い若者たちの感覚を頼りにして、どんな価値を自分たちの地域が生み出せるのかということを考えて仕掛けていくということが地域の再創造を可能にすると思います。特に日本全体の経済的な状況、国際的な中での立ち位置ということを見ると、もう東京で勝負だということよりも、むしろ僕は地域のローカリティーとか、その財産を使って国際的にも発信をしていくということのほうが圧倒的に可能性があると思いますし、そのときに大事なのは外国語と、外国とのネットワークです。そういう意味で、西和賀町の子供たちにもぜひ一回町を出て、ネットワークを広げて帰ってきてもらうとか、最初にギンガクを始めたときに考えていたことというところでお話ししましたが、どうしても国全体の人口が減っていきますから、西和賀町というネットワークを大事にしてもらうという発想で、地域を維持していく、持続させていくということを考えてほしいと思います。

特にヘルシーさというのは、冗談のように言っていますが、かなり大事なことで、特に欧米の資本家たちがエネルギー産業に関して、クリーンエネルギーにこそ投資

をする時代になっています。もう従来の発想で勝負していくというのは難しいし、そういう意味で西和賀町は木質バイオマスとか雪の活用というところで新しいエネルギーのことも考えているので、実はちゃんとインターネットを使って発信をきちんとした形で外国語を使ってやっていると、結構いいコンテンツがたくさん眠っていると思います。ただ、その感覚は全然今のところないということがあって、繰り返しになりますが若者たちの仕事を何とかふやしたいと思っています。

大切なのは創造性と相対化で、差異化です。創造性は新たにつくり出すこと、生み出すことへの意欲というものと同時に、価値というのがいかに生まれるかということの原則として相対化ということがあります。つまり自分と他人が違うから価値というのは生まれるわけです。同じものを、例えばこれを僕が500円で売ると言っても、僕はこれよりも500円のほうが価値があると思っているわけですが、これを買う人はこれは500円以上の価値があると思っている。つまりこれに対する価値が僕と買う人で違うということで価値は生まれるわけです。だから、芸術文化は経済的な価値創出には直接的に影響をもたらさないのですけれども、西和賀町の人たちに芸術文化を通じて人との違いとか、自分たちについて考え直してもらい、その感覚を持ってもらうことで、もうちょっと町がひらけていく、自分たちの町に何があって、ほかには何があるのか、逆になのかみたいなことを考えていってもらいということ、何か地域の経済的な持続可能性にも貢献ができるのではないかなということを考えています。ざっくり言ってしまうと、もうちょっと外のことを知ってほしいと思います。移住、定住に関してもそうですけれども、もったいないと思うことがたくさんあります。西和賀町にみんなが来て何を言うかということ、もったいないと言います。そこら辺どうにか、私のほうで改善できることというのは結構微力な部分もありますし、一見してわかりづらいので、劇場で何でということもありますから、芸術文化でなぜというところもあるのですけれども、人づくりをまずしていくこととか、意識を変えてもらうというところで、自分としては貢献をしながら移住の呼び込みというか、西和賀町にむしろ住まなくてもいいのですけれども、西和賀町にゆかりのある人というのがふえていき、そこから町がもっと広がっていく、ひらかれていくということが大事なのではないかということを考えて今も仕事をしているというところです。

後半は地域の話ということでお話をさせていただきました。ここで私のプレゼンテーションを終わりたいと思います。御清聴ありがとうございました。

○**佐々木努委員長** これより質疑、意見交換を行います。ただいまお話しいただきましたことに関し、質疑、御意見等がありましたらお願いします。

○**千葉絢子委員** 移住政策というのは、どこの都道府県も力を入れて、人口減少の一つの活路として考えているというのが実感としてあるのですけれども、一方で地域間での人の取り合いになってしまわないかという懸念も言われています。小堀さんのきっかけを伺うと、西和賀町の最初のコンタクトというのは本当に偶然のものであって、そこからのつながりが移住につながっていったという経緯をお伺いいたしました。そして、その移住して

くださった方がその地域をひらいていくために何か新しいことを始めよう、交流人口をふやそうという取り組みをしてくださっているのは地域おこし協力隊の皆さんの貢献度の高さなのかなというところを感想として持ったところなのです。一方で新しい取り組みを始めて、外から人を呼ぼうとした場合、それを企画している限られた人のものになりかねない部分が出てくると思うのです。例えば国際化をしようということでも、国際交流協会とか、そういったところがある意味、仕事だったり、ネットワークだったりを囲い込んでしまう可能性というのも秘めていて、そうやって外から持ち込まれた価値観に地域の住民の皆さん、どのように取り込んでいくかというところで大分お知恵を使われたのではないかなと思います。特に最初おっしゃったような西和賀町のような閉鎖的な環境の中で、外から人を温かく受け入れていくための動機になるものというのはどんなところだったのか。そこを実感としてお聞かせいただければと思います。

○小堀陽平講師 まさに困っている部分でもあるのですけれども、特に演劇という、私のやっていることが日本の中ではマイナーな文化でもあります。そこにどうやって、そもそも関心がなかったりした地域の人たちを巻き込んでいく、取り込んでいくかというところですが、これを言ってしまうと身もふたもないところですが、まず一つとしてあるのは、巻き込まないということも大事にしたいと思っています。というのは、特に西和賀町は今5,800人ぐらいの人口になっているのですけれども、私が始めること以前に町の中でやってきたことだけで取り合いになっているような状況があります。だから、子供たちは本当に忙しく、習い事をしに北上市に行っている子たちもいますし、当然中学生ぐらいになるとスポーツ少年団をやっていますし、そのほか芸術文化団体にも顔を出し、学校行事もあるみたいな中で、行政のほうでもいろんな大会だとか、さっきの廃校活用の事業だとかというイベントも仕掛けて、継続して仕掛けてきてしまっているの、いっぱいいっぱいになっている部分がありますから、広く呼びかけて広く参加させなさいというのもそもそも無理だと感じています。だから、参加してほしいですけれども、選択肢を用意しておくという考え方を大事にしている部分もあります。むしろ町内にいてやりたいことができないという環境をなくしていきたいと考えています。限られた人たちになるのですけれども、それは当然で、ただ、その人たちがやりたくてもできないから、町から出ていってしまうということを防いだほうがいいのではないかと感じています。

もう一つですけれども、どう広げていくかの部分は、最初は限られた人たちでいいと考えています。というのは、今私は行政の嘱託職員という形でアートコーディネーターをやっているの、行政としてはなるべく多くの町民に呼びかけをして、何人参加してくれたかというところで成果を見るのですけれども、ただ行政対住民という単純な構造になってしまうと、かえって持続しないし、広がりを持たないということもこの4年間で実感したところ。そうすると、行政の職員ばかりが大変になっていってしまうということもあるし、住民の主体性が育たず、すぐに行政頼みになってしまうところがあります。住民の中に最初に熱を持ったコアな人たちをつくるということが大事なので、限られた人たちが

きちんと続けてくれる、そしてさらに呼びかけをしてくれるという応援団というか、住民側の主体性をつくっていくことが大事だと思っていますので、そこは段階を分けて考えていく必要があると思います。

なので、銀河ホールでことし予算はとれていないのですけれども、やっぱり行く行くは国際的な滞在制作を呼びたいと思ったりしているのですけれども、そのときにも例えばさっきの地区の方々みたいに、この地区でやっています、その地区の人たちが楽しんでくれていますというモデルケースをつくるのが大事だと思っていますし、それからちょっとずつアルバイトみたいな形でできる仕事もふやしていけたらというのが自分のイメージとしてはあります。例えば契約書を英語でつくるとか、英語でメールのやりとりをするということは、多分アウトソーシングができます。住民の方々とか、あるいは高校に言って、高校の授業の一環で子供たちに海外のアーティストとのやりとりをさせるとか、そういう考え方もあっていいのではないかと思いますので、そういう細々したところで地域のかかわりをふやしていくという広げ方もあるのかと今のところは考えています。

○千葉絢子委員 もう一点お伺いしたいのですけれども、せっかく若い人たちの交流人口がふえたところで、定着につなげていくためには、やはり雇用につなげていく必要もあると思います。小堀さんの場合は嘱託の職員という形でうまく移行ができたからすごくハッピーなケースだと思うのですが、大概山間部では限られた雇用しかないので、限界集落などを抱えた町に若い人を定着させていくために、次にどんな仕掛けを考えていらっしゃるかお伺いしたいと思います。

○小堀陽平講師 これも難しい問題だと思いますけれども、西和賀町に限らず全国的に若い人たちに対して感じていることというのは、雇ってもらおうという発想をもうそろそろやめなければいけないと感じます。これだけ、連呼していますけれども、インターネットのデジタルの時代に入っている中で、コミュニケーションも変わっているし、物や人の流れも全く変わってきてしまっている中で、それがさらにこれからITというか、AIですよね、いろんなことが人工知能化されていく中で、世界がかなり変わっていく過渡期にあると思っています。そういうこれから明らかに衰退しない、発展しかしていけないものに対してまず敏感になることと、その中で自分たちが次にどういう社会をつくっていくかということを考えないと、今までの既存の日本の社会の仕組みの中で、どこかの企業に就職をするとか、雇ってもらおうという発想で西和賀町で仕事をしていこうというのは、これはかえって自分たちの可能性を狭めるだろうと考えています。

特に西和賀町の場合で言えば、農林業をなりわいとしてきた地域ですので、それをどうネットワーク化するかということの一つ可能性があるのではないかと考えています。やればいいのにやっていないことって、ざっくりばらんな言い方をすればそういうことだと思います。いまだに農業協同組合に出荷して、共選をしてという農業の仕方をしていまして、町としても農業振興課が出してくる農村振興プランは、そういうことを前提に考えています。西和賀町でワラビにすごく力を入れていますが、ではワラビがどこに売れるの

か、どういうマーケットがこれからつくれるのかということ、そのときにどういう販売の仕方があり得るのか、そういう顧客とか販売ルートをつくっていくのは、むしろ若い人たちがやるべきことだし、新しい技術を使ってやっていくべきことだと思います。その辺のことを誰かが用意してくれて、そこで自分を雇ってくださいではなく、自分たちが仕組みをつくって、地域の人たちに持ちかけをしていくということが大事ではないかなと思います。そこはちょっと若い人たちの自己責任というのを僕としてはもう少し考えるのと、地域の人たちにとって、先行世代と言っていいと思いますが、その人たちには、そのチャレンジをどんどんさせる、そういう場をつくったほうがいいと思います。ちょっと捨て身な感じになりますけれども、うちで雇ってあげるよということよりも、うちでこれを使ってやっていいよという場の提供を、開いていくというのが大事だと思います。

○関根敏伸委員 まず、単純にお聞きしたいのですが、小堀さんの経歴を考えたときに、芸術、特に演劇という切り口からいえば、都会でもっとさまざまな多様な人がいる中で、いろんな情報発信ができるところで御活躍されればいいのではないかという気がするのですけれども、いろんなきっかけがあったにしろ、あえてこの西和賀町で芸術文化を切り口にしたいろいろな活動をしていこうと思った要因を教えてくださいたいと思います。また、単純に今の生活に、収入がふえなければ支出を減らせばいいのだということで、西和賀町に暮らして4年目になられると思うのですけれども、今の生活が、いわゆる収支的な面も含めて、幸福度と言ったほうがいいのか、そういった観点でどのように今お考えになっていらっしゃるのか、まず単純にお聞きをしたいなと思います。

○小堀陽平講師 では、後の質問のほうから単純にお答えしますが、食いぶちが1人ふえて大変です。その分は収入をふやさないといけないと思っているので、そこは、行政とは違う形の社団法人でやっていければと思います。逆に行政ができないことを我々が担い手にならなければいけないというところでやればと思っています。

ただ、ちょっと過労ぎみなので、そこら辺も気をつけなければいけないと思っていますが、そこもやりがいと、一緒にやる人がいるかどうかだと思っています。ちょっと変な言い方かもしれませんが、どういうところで報われていると感じられるかということが大事だと思うので、つまりお金のこともそうなのですけれども、ストレスの問題です。その部分でギンガクを通じて新たに2人の協力隊が入ってきてくれたというのは、私としては新年度を迎えて心安らかです。

もう一つ、芸術文化をなぜ西和賀町でというところですが、今全国の地方公共劇場が文化的コモンズということテーマにというか、キーワードにして動いているところがあります。コモンズは日本語で言うと入会地みたいな意味合いです。劇場に関しては、劇場、音楽堂等の活性化に関する法律というのが数年前にできて、ようやく設置の根拠法ができたところです。その前文で、新しい広場という形で劇場の機能がうたわれておりまして、必ずしも都会で芸術文化を先鋭化させていくということではなく、その地域の地域づくりにいかに貢献ができるか、それはもちろん民間企業も含めて、いかに地域のパート

ナーシップをつくって、地域を復興したり再創造していけるかという、その拠点となるべきだということが言われている時代です。その部分では特に、個人的には場所は余り関係ないかと思っていますし、そういう劇場間でのネットワークをつくっていくという意味でも東北に拠点ができていくというのは大事だと思っています。

個人的には、日本全国を俯瞰して見たときに、関西よりも南のほうが芸術文化、劇場の動きというのは盛んです。東北、特に北東北は、それこそ滞在制作の条件としては、地域的にはすごくすぐれているのに、その拠点が全然ないというところで、言い方は悪いですが、個人的に誰もやっていなくて、やらせてもらえてしまいそうな穴場だと思っていたところがありました。だから、最初はギンガクだけだったところなのですけども、ギンガクを始めたときにもう一つ実は考えていたのは、銀河ホールの運営もそのうちできてしまうのではないのかということでは思っていたところがあって、まんまとやっているというところが正直あります。別にそれは何かあくどいことを考えているわけではもちろんないので、自分が劇場を動かしているのであれば、西和賀町ないしは県、それから北東北という形で、銀河ホールという小さな劇場ないしは西和賀町という環境を使って、あとは温泉があるのは強いですから、そこに人が来るような循環をつくるというか、ネットワークをつくるということで考えています。そういう意味では、都会は演劇公演の数も多いし、芸術文化の人口密度も高いのですけれども、あまり関係ないというのが私の感覚です。

○関根敏伸委員 1点目で言えば、収入は確かに減っているのでしょうかけれども、ストレスといったトータルの面で満足をされていると捉えればいいのかと思っております。

あと、御承知だと思いますが、今県でも文化スポーツというのを一つの切り口にして、岩手のさまざまな可能性を広げていこうということで、組織もそうなっています。文化、芸術、演劇もそうなのですが、それを地方の切り口にしていこうとしたときに、いろんな施策をこれからやっていくことになるのだらうと思いますが、やっていったことに対してそれを評価する指標、芸術文化と地域ということ考えたときにどう施策をつくって、その評価をどうしていったらいいのかというのは、単純に人を集めて人数が集まったからいいと評価するのか、例えばお芝居であれば人づくりというところに本質的な意味があるから、そういったものに目を向けた評価をして施策を打っていけばいいのか、なかなかちょっとわからないので、それはどうお考えになっているのか。

あわせて、いろんな形で県とか町の芸術文化に携わる職員の方々と接する機会も多いと思うのですが、県も含めてですが、我々に対して、芸術文化に対しての立ち位置など、いろいろ思っていることがあったら教えていただきたいと思います。

○小堀陽平講師 まず、成果指標についてですけども、非常に難しいところではあるのですが、全国の中で一番小さな自治体で国から重点拠点として認められていて、予算もおりている劇場として岐阜県の可児市というまちの可児市文化創造センターがあります。こちらの取り組みを調べていただければと思いますが、こちらでは衛紀生さんという方が館長をやっており、市民劇とか市民参加型のプログラムに非常に力を入れていまして、それ

が地域の経済効果にもなるのですけれども、例えば教育にかかるお金がどれくらい減るかとか、各家庭の負担がどのくらい減るかとか、そういったことを数値化するプログラムがあるそうです。僕もちょっと詳しいところまではわかっていないのですけれども、そういったことに非常に意識の高い劇場なので、そういったものが一つあるのと、それから長野県の松本市のまつもと市民芸術館という劇場がありますけれども、先代の中村勘三郎さんが最後に舞台に立ったという劇場です。そこでは、劇場が建てられたときに反対運動があったという形で、恵まれない、望まれない形で生まれた劇場なところもあったので、地域の方々に納得をしてもらわなければいけないという事情があったそうです。その中で、経済効果を指標として出す調査をするための補助金というのを、総務省だったか、地域創造という財団法人だったかは忘れましたが、つくってもらったという経緯があったという話を聞いたことがあります。それは7割ぐらい補助がつくというような、かなり補助率の高い補助金の制度を中央省庁につくってもらって、それで劇場の成果指標を出すということをやったというお話は聞いたことがあります。その成果指標の出し方までは私まだ知識も経験も追いついていないのですが、全国では同じような課題というか、悩み等から取り組みをしているところはあるようです。

芸術文化についての思いですけれども、岩手県内に関して言うと、芸術というより文化のほうが強いです。郷土芸能とか、特に沿岸のは芸能の宝庫ですので、三陸国際芸術祭とかそういうプログラムをやっていますけれども、前に県政懇談会に呼んでいただいたときにもちょっとお話ししたのですが、今ちょっと自分の整理としては文化というのは自分たちが何者であるかというのを教えてくれるものとして考えていて、芸術というのはそれを問うものである。だから自分たちが何者なのかというのを問うのは芸術なので、基本的にわからないのです。これ何というようになるのが正しい芸術のあり方で、文化というのは何なのかがわかるものです。自分たちのルーツをちゃんと教えてくれるところが文化なので、そうやって考えるとちょっとわかりやすいかと思います。

自分たちが何者なのかということを中心にしながら、次の世代のことを、次の時代、次の世界のことを問うていくというのは、バランスを持って取り組んでいくべきだと思います。その意味で文化も大事にしながら、しかし若い人たちがやるよくわからないことを、何を今この人たちは見て考えているのかというところにチャンスを与えてあげるということを芸術文化の取り組みとして何か考えていかなければと思います。

○名須川晋委員 大変勉強になりましたし、実際この活動をされている現場に行ってみると、もっと理解が深まるのかなと思いましたので、いずれ有志を募って伺いたいと思います。

そうした中で、今お話しされている先生の理論というのはすばらしいなと思ったのですが、日本大学の芸術学部や大学院でこういうカリキュラムというか、なんと云うのかわかりませんが、最後のページに書かれているようなことを学ばれる機会があるのか。あとは小堀先生のような活動をされている若い担い手の方々が全国で特色ある取り組みをされて

いる、参考になるような事例というものはあるのかどうか教えていただきたいと思います。

○小堀陽平講師 まず、学ぶ機会ですけれども、自分たちで学んでいかなければいけないところですが、劇場職員の研修というものはあり、ことし県の補助金でもつけていただいたところですが、一般財団法人地域創造が全国の劇場や文化施設の調査等もやっており、そこで、研修事業を結構頻繁にやっております。その研修に参加したり、これもインターネットの話になりますけれども、そこで持ち得たネットワークを通じて、知り合いになった方々から紹介される文献、インターネット上でも読めるような文献とか、各地の劇場での取り組みとか、アーティストの状況というのが基本的には日々の学びにつながっていくと思います。それからもうちょっとアカデミックなところで演劇理論がどう変わっていつているのかに関しても、西和賀町にいるとなかなか直接的には触れられないところではあるのですけれども、人脈が物を言うところだと思います。フェイスブックは結構大きいと思います。

西和賀町で、専門の活動をしてきたとか、教育を受けてきたという彼女たち2人が劇場のスタッフになったということは、すごい強みだと思います。どうしても劇場職員という仕事はなじみがないですし、特に西和賀町の行政の中でも、アーティストが来たときに同じレベルで話ができないとか、アーティストたち、ないしは参加する人たちが満足できるようなプログラムを行政の職員にやれというのはかなり厳しいものがあると思います。ほかの劇場でも苦勞しているところかと思いますが、うちにはそういう意味で若い、非常に高度な話のできるスタッフがそろったのは大きいと思っています。

全国的な事例でいうと、同じような学生たちを対象にしたものを各地でやっていますが、京都府で全国学生演劇祭というものがこの数年前から始まっています。実は、京都府にいたときに働いていたNPO法人の同僚がつくったものなのですからけれども、こちらは総本山というか、予選を全国各地に同じ仕組みの演劇祭をつくって、最後の決勝戦を京都府で行い、京都府に集まってくるという形の取り組みはあります。東北だと仙台市で予選をやっています。それ以外になってくると、各地方公共劇場がそれぞれ特色のある取り組みはされているので、どこがというところちょっと難しいところがあります。

あとは、滞在制作ということに関して言えば、特に若い人たち対象ということではないのですけれども、同じく温泉と芸術文化を組み合わせるの滞在制作は、今、兵庫県の城崎温泉が日本で一番だと思います。岩手県でもアドバイザーを務めてくださっている平田オリザさんという劇作家の方が、今度劇団を、東京大学の目の前の駒場の自宅を劇場にしていたところから拠点を豊岡市に移すまで動いています。そちらはもともと劇場ではなくて、大会議場だった城崎国際アートセンターというところを拠点に、城崎温泉を同時に楽しんでもらいながら海外、国内からアーティストを呼ぶという形で動いています。大きなことを言えば、西和賀町もそれぐらいやりたいというところがありますけれども。向こうは、小さな国際都市を目指すというスローガンで豊岡市自体が動いています。それから城の崎にてという大きな文学作品があるので、その21世紀版をつくるというわかりやすい意気込

発信するののかということも、さっき行政の事業を住民にもっとアウトソーシングしていければという話をしましたら、同じことだと思っていて、行政の人間が情報発信をするのではなくて、どう考えてもインターネットはユーザーが発信する時代ですよね。だから、西和賀町のような景観がよい、食べ物がおいしい、見どころがあるというところだったら、いわゆるフォトジェニックな撮影スポットがいっぱいあるわけです。そこで、問題はw i - f i がつながるかとか、近くに電波塔が立っているかとかです。きょうも3人で来中、車で走っていて、山伏トンネルを抜けたところで電波が入らなくなったという話になり、山伏トンネルを抜けた先だから西和賀町ではないのですが、そういうことがもう少し環境が整備されると、別にそれによって役場職員の仕事がふえるとか、大変だということではなくて、むしろ可能性が広がるというところで御理解いただけないかということを感じます。遠方から友達とか、学生たちを呼んだときに、ちょっと一息ついて、一回スマホを見たいという時代です。それは行儀が悪いとか、マナーがどうかではなくて、ストレスの問題としてもそのタイミングが必要だと思います。そのときにインターネットがつながっていないスマホというのはほとんど意味がないので、そこで機能させられるようなスポットをもうちょっとつくってほしいと感じます。

西和賀町の人たちについてですけれども、議員がおっしゃったようなところがほとんどだと思います。湯田地区と沢内地区の方々に、よくも悪くも人間性が全然違うところがありますし、そこで二分できないところがあります。ただ、どちらにしても西和賀町の方々に、かなりユニークな人が多いと思います。実は、いろんなことに興味を持っているし、そこにのめり込むモチベーションというか、バイタリティーはすごくあります。だから、人口は減っているものの、一人の持っているエネルギーがかなり大きいので、それは何でもこなす高齢者がいるとか、子供たちがすごく話ができるという話もちょっとしましたが、ほかの、特に都市部の人たちよりも大きな強みなのではないかなと思います。人のエネルギーはとてもポテンシャルが大きいと思いますし、個人的には湯田地区と沢内地区の気質の違いというか、多分それは環境もそうだし、たどってきた歴史の問題なんかも大きいと思うのですけれども、どちらもポジティブに考えたいと思っています。沢内地区の方々の実直さが西和賀町を導いている部分もありますし、湯田地区の人たちの明るい、どちらかといえば何でも受け入れてくれるような気質というのが結構外部からお嫁さんを呼んできたりとか、僕みたいな人間が入りやすい空気をつくっているというところもあると思いますので、仲よくしましょうよと思うときがたくさんありますが、そういう意味でも文化施設が役に立っていただけたいと思っています。

○佐々木努委員長 ほかによろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 それでは、ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了したいと思います。

小堀様におかれましては、本当にお忙しい中、我々の調査に御協力をいただきましてあ

りがとうございました。今後のますますの御活躍を心より御祈念申し上げたいと思います。

委員の皆さんは、次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばしお残りください。

次に、5月に予定されております当委員会の県内調査についてであります。お手元に配付しております委員会調査計画案のとおり実施することとし、調査の詳細については当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

次に、8月に予定されております当委員会の調査事項についてであります。御意見等はありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 特に御意見等がなければ当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。